

インド・ラダーク地方南東部チャンタン高原における遊牧と交易

稲村哲也

愛知県立大学国際文化研究科

筆者は、総合地球環境学研究所の「高所プロジェクト」の一環として、2012年9月に短期間チャンタン高原のルプシュの遊牧民の調査を行った。チャンタンでは、医学班が2011年に遊牧民の健診を実施している。そこで、本調査では、その研究との連携を主目的とし、遊牧の移動のパターン、世帯、住居、かつて行われていた交易とその衰退、また、その変化について論じた。ルプシュ遊牧民は、一年を通して、8ヶ所のキャンプ地を移動する。ルプシュでは、キャンプ地が固定しているだけでなく、その中でのテントサイトも固定する傾向にある。石積みの半地下式テントサイトは、寒さを防ぎ少しでも快適に生活するための工夫である。ラダークのチャンパは、以前は遊牧と交易によって生計を立ててきた。遊牧については、基本的なシステムは継承されている。一方、かつて行われていた、北のチベット、西のザンスカル、南のヒマチャル・プラデーシュへとゆく長距離のキャラバン交易は、約15年前に消滅した。その背景は、中国との国境紛争、舗装道路の開通、政府による食糧配給による援助、さらに、レーの都市の拡大・観光化や軍の需要などによる市場経済化である。交易の消滅に伴って、ルプシュの遊牧民の活動は以前よりも軽減した。またオオムギに大幅に依存していた食生活は、配給制度によって食材の多様性が増すなどの変化が起こっている。

1 はじめに

筆者は、総合地球環境学研究所の「高所プロジェクト」(代表奥宮清人)の一環として、2012年8月25日から9月5日までラダークで調査を行った¹。そのうち、9月1日から9月3日まで、極めて短期間であるが、チャンタン(Changthang)高原でヤクとヤギ、ヒツジを飼う遊牧民の調査を行うことができた。調査地域は、正確には、ラダークのチャンタン、あるいはその中のルプシュ・チャンタンまたは単にルプシュ(Rupshu)などと呼ぶべき地域である。というのは、チャンタンは「北の高原」を意味し、本来、西はレーの西方1000マイルから中央・北チベットを経て東は中国青海省に至る広大な地域を指し、チベット高原の69%を占める地域だからである(Goldstein and Beall 1990: 41, Ahmad 1999: 33)。ラダークのルプシュ地方はそのチャンタンの端に位置している(Ahmad 1999: 33)。また、ルプシュは、行政区分としては、ニョマ(Nyoma)地区(Block)に属している。

ラダークのチャンタン(以下は単にチャンタンとする)のルプシュへのアクセスは、レーからマナリ(Manali)に向かう道路を南下する。途中、工事中箇所が多いものの、舗装された幹線道路であり、タグラン峠(Taglang-la: 標高5360m)まで約3時間の行程で、峠を越えるとそこがルプシュへの入口である(図1)。その地域の北には北西—南東方向にラダーク山脈が貫き、南には、やはり北西—南東方向にザンスカル山脈が走っている。ザンスカル山脈の南側には、それに平行してグレート・ヒマラヤの西端が、同じく北西—南東方向に貫いている。

ルプシュは、人の居住圏としては最も標高が高い地域のひとつで、一年中寒く乾燥した荒涼たる景観が広がっている。そこでは農耕はできないため、人びとは遊牧とキャラバン交易に従事してきた。ただし、交易はいくつかの要因・背景により、約15年前までに衰退した。

チャンタンの遊牧民はチャンパ(Changpa)と呼ばれ、ルプシュパ(Rupshupa)、コルゾクパ(Korzokpa)、カナクパ(Kharnakpa)の3つの集

団に分かれている。ラダーキーがその中心だが、チベットから難民として逃れてきた遊牧民が加わっている。その3集団は、それぞれがルブシュ、コルゾク、カルナクという地域をその居住地域・移動範囲としている。コルゾクはルブシュの南の地域、カルナクはルブシュの西の地域である。カルナクパの遊牧については、平田が2011年8月に現地調査を行っている（平田2012a, b）。

タグラン峠を越えてその麓に下っていくと、谷の対岸（右岸）にルブシュパの放牧地のひとつディブリン（Dibring）が見える。そこから谷を下りきるとザラ川（Zara Chu）に合流する地点でザラ（zara）に至る（図1）。ザラはルブシュパの秋の放牧地である。ザラ川はそこから南西に向かって下っていき、やがてザンスカル川に合流する。ザラはカルナクパの夏の放牧地でもあり、ここから西がカルナク地域である（平田2012a）。つまり、ザラはルブシュパとカルナクパの放牧地の重複地点である。マナリへの幹線道路はそこからザラ川の支流を溯上するかたちで南下し、数10 km 先で道が南西に向かうあたりを南に入った小谷がノルチェン（Norchen）である。2012年の9月初旬、ルブシュパ集団はこのノルチェン谷に滞在していた。そのキャンプ地の中心付近の標高は約4800 mであった。

チャンタンでは、地球研「高所プロジェクト」の医学班が、2011年に、高所の遊牧民の健診を目的としたメディカル・キャンプを実施している。そこで、本調査では、その医学班の研究との連携を主目的とし、遊牧システムとりわけ移動のパターンと世帯と住居、かつて行われていた交易とその衰退、また、変化の背景に焦点を当てた。医学班の調査実績により、現地住民との間にすでに信頼関係が築かれていた。とくに、前年までゴワ（集団の長）であった Sonam Dhargyel 氏には、全面的に調査に協力していただいた。そして、月原敏博氏の長年の調査協力者であり、医学班の調査のコーディネータも務めた Tsering Dhargyel 氏に手配と仲介をしていただいた。そうした経緯と協力のおかげで、効率的な調査を行うことができた。

2 遊牧の形態

2-1 チャンパのキャンプ地と世帯と住居

ルブシュパ集団は、調査時にはノルチェン（標

高4800 m）をキャンプ地としていたが、ここでは、75戸がテントで生活しており、そのうち、ラダーキーが54戸、チベット人が21戸であった。コルゾクパ集団は、正確な数は不明だが、ラダーキーとチベット人を合わせて100戸以上であるという。カナクパ集団は、ラダーキー15戸、チベット人4戸である。カナクパのメンバーが少ない理由は、以前は100戸以上だった世帯のうちの多くが、7年ほど前にレー（主としてチョコラムサル地区）に移住し、定住生活をするようになったためである。なお、1920年代にはルブシュには約30のテントがあり、30家族のチャンパが暮らしていたと、Rizvi が報告している（Rizvi 1999: 120）。

チャンタンパは、家族単位（あるいは数戸の単位）で自由に移動しているわけではない。ノルチェン谷に75戸がテントを張って住んでいたが、そのように、各集団は、そのメンバーのほぼ全員が同一地域で集会的キャンプを作りながら、一年を通して移動している。筆者が調査を行ったルブシュパの場合、後で述べるように8か所のキャンプ地を移動している。家族構成を聞き取りした7世帯（家長の年齢が30代から60代）はいずれも核家族であった。つまり、一張りのテントは核家族に対応していることになるが、父・息子、兄弟、オジ・オイなど近い親族が近くにテントを張る例がみられた。また、近くにテントを張る親族の世帯同士が、ヤギ・ヒツジの群を一緒にして日帰り放牧をしているようであった。

7世帯の子供の数は3名から7名で、合計28名（平均4名）あったが、いずれの世帯にも学校に通う子供がいて、計12名の就学生がいた。そのうち9名がレーの学校、2名がニョマの学校、1名がルブシュの東にあるスプガ（Spuga）村の学校に入っている。また、僧が2名、尼僧が1名、レーで働く者が1名、軍隊に入った者が1名であった。牧民となっている者は3名、他は幼児である。

ルブシュパの人びとの結婚については、コルゾクパなど他の集団との通婚もあるが、集団内での結婚がほとんどである。医学班のデータでも、40才から85才までの受診者42名（男性20名、女性22名）の中でチャンパ以外とのあいだの婚姻は全くみられなかった。若い世代で通婚に変化がみられるかは不明である。

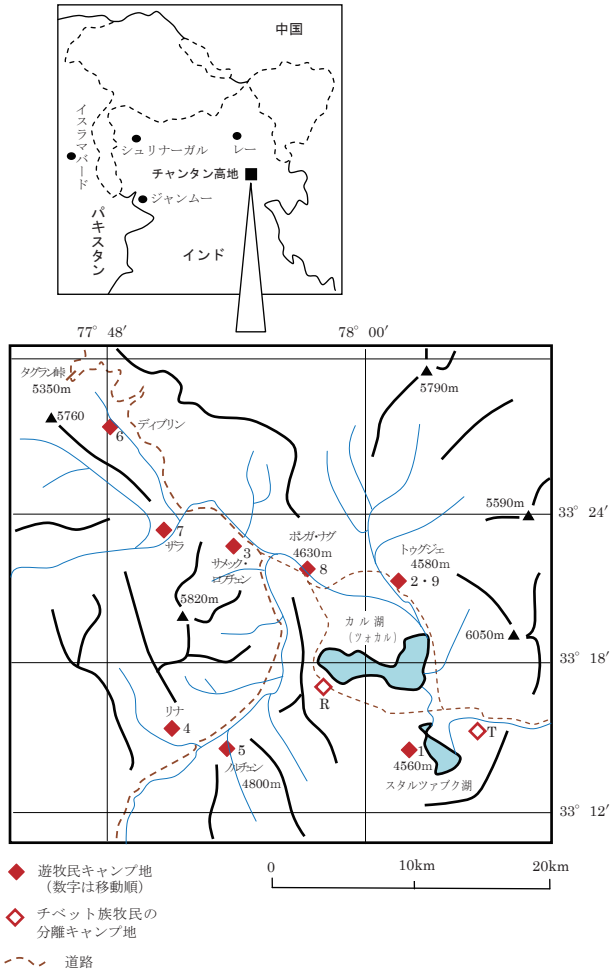


図1 チャンタン高地の遊牧民「ルプシヨパ」集団のキャンプ地(8ヶ所)



写真1 伝統的なヤク毛のテント。長老がテントの前で昼寝をしている。



写真2 白い布の新しいテント。牧民がヤクの子を繋ぐロープを片付けている。白いロープは地面に張るもの。

各世帯は、伝統的なリボ (ribo) と呼ばれるヤク毛の織布のテント、または、新しい白いキャンバス製のテントで生活をしている (写真1-2)。伝統的なヤク毛のテントは全体の一割程度である (伝統的なテントの形態は図2)。新しい白いテントは二種類あり、伝統的なテントの形態を継承したタイプと天井がより水平的で居住空間が広くなったタイプとがある。

テントは、半地下式の石作りのテントサイトの上に張っているものが多い (写真3)。従って、各世帯がキャンプ地の好きな場所に張るというわけではなく、毎年同じ場所にテントを建てるのが

原則となっている。

ノルチェンに、テントを張っていないテントサイトがいくつか見られたので、その一つの概略図 (平面図と入口側内側面図) を作成した (図3)。床面は地面から40~50cm低くなっている、その四方の半地下の壁面は平石を積んで造られている。この方形の壁面は平石一つ分ほど地面より高くなっている。壁面の一部は凹ませてあり、物入れの機能を持たせている。入口には一段の階段があって、そこから半地下の床面に入る。その正面奥には、板を置いて壇をつくるための二列の石が据えられている。

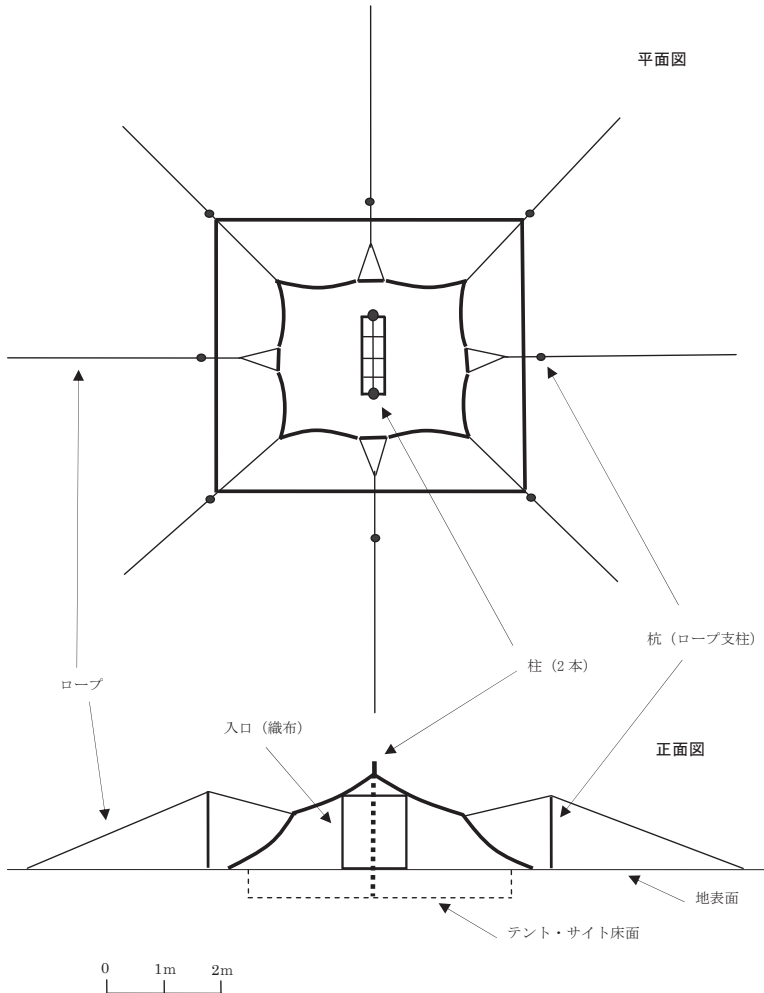


図2 チャンタン高地の遊牧民のテント



写真3 半地下式テントサイト。寒さを和らげる工夫であるが、毎年同じ場所にテントを張ることになる。



写真4 半地下になっているテントの内部。正面の三段の棚の最上部はチベット仏教の仏壇になっている。

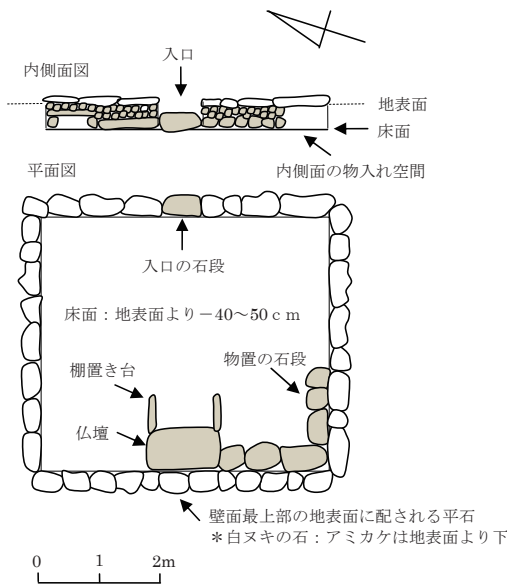


図3 チャンタン遊牧民のテント・サイト

実際に生活しているテントの中を見ると、正面奥にたいてい三段の棚があり、最上段にチベット仏教の仏像、仏画、仏具、供物などが置かれ、下の二段が食器などを置く場所として使われている（写真4）。テントは二本の柱で支えられている。中央には鉄製のカマドが置かれ、その煙突が二本の柱のうち的一本と平行して立てられている。

2-2 ルプシュパ集団の季節移動

ルプシュパは、前キャンプ地のリナ（標高約4900 m）に約20日滞在し、7月後半にノルチェン（標高約4800 m）に移動してきた。そして、私たちが到着した日の翌日の9月2日に、次のキャンプ地であるディプリン（タグラン峠の麓に位置する）に向けてヤク（雄）・ディモ（雌）の大きな群が発射した。早朝の搾乳の後に、各戸のディモが次々と合流し、数千頭となって移動していく様は壮観であった（写真5-6）。

夏の放牧地ノルチェンで調査を行ったほか、ツォカル（カル湖）の周辺とその南に隣接する小さな湖周辺にある3つの冬のキャンプ地を訪問し、その位置と標高を確認した。それらの標高は3560 mから4630 mの間にあり、夏のキャンプ地と比べて200～300 mほど低い。また湖とその周辺が盆地となっており、3つの冬のキャンプ地は厳しい寒さを避ける場所に立地している。冬のキャンプ地は特に、石積みの家屋・貯蔵庫と家畜囲いがあるが、冬以外には無人となるため、考古遺跡のような雰囲気呈していた。

ルプシュパは、一年を通して、8ヶ所のキャンプ地を移動する。図1は、そのキャンプ地を地図上に落とししたものである。◆がキャンプ地の位置を示している。キャンプ地の名称、標高、滞在時期、特徴、遊牧活動などは下記のとおりである。実際に訪問して、位置と標高を確認した場所には下線をつけた。



写真5 ヤクの季節移動。数名の牧民がルブシュパのすべてのヤクを次のキャンプ地に追う。



写真7 冬のキャンプ地「スタルツァブック」。湖畔の丘の麓に位置し、石積みの家、家畜囲い、テントサイトが集合している。



写真6 数千頭ものヤクの季節移動は、他の場所では見られない光景である。



写真8 冬のもうひとつのキャンプ地「トゥグジェ」。母村のような役割を担っているようである。

①スタルツァブック (Startsabuk)

冬のキャンプ地で、ここに約3ヶ月間滞在し、3月に次のキャンプ地トゥグジェに移動する。石積みの家屋・貯蔵庫と石組のテントサイトと子家畜用の家畜囲いが組み合わさった「小集落」を成している(写真7)。ここで、1-2月にディモ(ヤクの雌)が子を出産する。2月にはヤギ・ヒツジが出産する。ヤギは、出産後の約1カ月は泌乳量の半分だけを搾り、半分は子ヤギに哺乳させる。その後、1ヶ月は哺乳のために搾乳を中止する。出産から2カ月以後は、子家畜を他の牧民の子家畜と交換して放牧することにより、母子を隔離して搾乳する。

②トゥグジェ (Thugje)、またはトゥグジェ・ゴンパ (Thugje Gonpa)

ここに約1ヶ月滞在し、4月に次のキャンプ地



写真9 ツォカル(カル湖)の湖岸に白く堆積した塩。ツォカルの塩は、中印国境紛争以後チベットの塩に代わって交易に用いられてきた。

サメック・ロブチェンに移動する。石積みの家畜囲いと家・貯蔵庫が多く建てられており、集村の様相を呈している(写真8)。夏の調査時に訪問したときも若干の住民が滞在していた。丘の上に

ゴンパ（チベット仏教の寺院）がある。カル湖（Tso Kar）の北東岸に位置し、湖岸には草原が広がっている。ツォカル（カル湖）は塩湖であり、湖畔の一部には塩分が白く沈殿しており、ルプシュパはここで塩を採取する（写真9）。季節移動のためヤクがノルチェンからディブリンに向けて出発した後、テント内の荷物を車でドゥグジェに運ぶ世帯があった。つまり、このドゥグジェは、ある程度、母村の役割を担っていると思われる。

③サメック・ロプチェン（Samek Ropchen）

春の放牧地で、ここに約2ヵ月滞在し、7月初めに次のキャンプ地リナに移動する。幹線道路に近い。このキャンプ地の位置は確認していないが、聞き取りにより所在地を推定した。

④リナ（Rina）

夏の放牧地で、ここに約20日間滞在し、7月後半に次のキャンプ地ナルチェンに移動する。ここで2011年のメディカル・キャンプが実施された。草が豊かな年は、ヤギ・ヒツジが二回目の出産をする。2012年は出産はなかったという。このキャンプ地についても位置は確認していない。

⑤ノルチェン（Norchen）

調査を行った場所。夏の放牧地で、ここに約2ヶ月間滞在し、9月初めに次のキャンプ地ディブリンに移動する。2012年は、移動のためヤクの大群が9月2日に出発した。幹線道路から南に入る谷で、谷の奥（上流部）にラダークの牧民、下流の方にチベットの牧民が占め、計75戸のテントがあった。

⑥ディブリン（Dibring）

秋の放牧地で、ここに約20日滞在し、9月下旬に次のキャンプ地ザラに移動する。タグラン峠の麓の谷に位置し、幹線道路からも近い。幹線道路から、石積みの家畜囲いやテントサイトを確認した。

⑦ザラ（Zara）

ここに9月の約1ヶ月間滞在し、10月に次のキャンプ地のポンガ・ナグ（Ponga Nagu）に移動する。ディブリンの南に位置するが、このキャンプ地に

についても正確な位置は確認していない。先に述べたように、このキャンプ地はカルナクパも利用している（平田2012a）。

⑧ポンガ・ナグ（Ponga Nagu）

10月から秋の約2ヵ月間ここに滞在する。ツォカルの北西岸の草原に位置する。石積みのテントサイトと家畜囲いの小集落が形成されている。12月にここから②のトゥグジェに移り、そこで10～20日間過ごしたあと、冬のキャンプ地である①のスタルツァブクに移動する。

以上のようにチャンパは8か所のキャンプ地を移動するが、②のトゥグジェには冬のキャンプ地滞在の前と後に滞在するため、9回移動することになる。ただし、春から秋にかけてルプシュパと移動を共にするチベットの遊牧民は、冬には、⑦のザラから⑧のポンガ・ナグではなく、リグ（Rigu: 図1の◇R）に移動し、そこで冬を過ごす。そして、出産期に当たる2月には、少し暖かい谷筋の窪地に位置するトグラ（Togula: 図1の◇T）に15日間くらい移動して、滞在する。

2-3 家畜、畜産物、乳加工

ルプシュパ全体の家畜個体数は、前ゴワ（長）によれば、2011年度の集計で、ヤク（雄）・ディモ（雌）の合計が4,247頭、ヤギ・ヒツジの合計が9,754頭である。75戸で平均すれば、1戸当たりヤク・ディモ57頭、ヤギ・ヒツジ130頭となる。

チャンタンは、ラダークの中でもとくに高所であり、風が強く寒さが最も厳しい地域である。それゆえに、パシュミナ・ヤギは在来の特長な品種で、とくに質の良い柔毛を産し、それを糸に紡いで高価なパシュミナ・ショールに織り上げられる。パシュミナは、古くからチャンタンにおける重要な産物であり、後に述べるように、ザンスカルなどとの交易の重要な品目であった。パシュミナと羊毛は、現在はレーから買い付けに来る業者に売っているようである。過去と現在におけるパシュミナをめぐる経済に関しては、今回の調査では十分に調べることはできなかった。

ヤギとヒツジは一緒に、キャンプ地から日帰り放牧を行う。ヤギは朝晩に搾乳され、そのミルクも重要な産物である（写真10）。ある程度育った



写真10 家族毎に行われるヤギの搾乳。慣れた母ヤギは自分から列に並ぶ。牧民はヤギの首を一気にほごけるようにロープで繋ぐ。



写真11 かつては、このようにヤギやヒツジに荷が積まれて、遠距離のキャラバン交易が行われた。今は日帰り放牧での荷物運びに使われている。



写真12 ディブレへの季節移動に際して、テントの中の荷物がトゥグジェに車で運ばれるところ。白いテントは天井が水平的な新しい形態のもの。

子ヤギは牧民間で交換し、別の成熟ヤギ群と一緒に放牧される。それは、搾乳のため、母子隔離を行うことで、放牧中に子ヤギが乳を飲まないようにする効率的な方法である。ヒツジも以前は搾乳されていたが、ヤギが増えたために、15年ほど前からはヒツジの搾乳は行われなくなったという。

出産したディモは一日に一回、朝に搾乳する。搾乳をしているディモは、キャンプ地から日帰り放牧を行うが、夕方、キャンプ地に集められると、夜は子ヤクを地面に張ったロープに繋いでおく。夜間に授乳をさせないで、朝までに乳を溜めさせるためである。朝、子ヤクをロープから放ち、少しだけ乳を飲ませて泌乳を促したあと、子ヤクをロープに繋ぎなおし、搾乳する。ディモは1回で約1リットルの乳が搾乳できる。チャンタンでは寒さが厳しいため、ヤクとウシの交雑種であるゾモは飼われていない。

チャンタンでは、ディモのミルクからまずヨーグルトを作り、ヨーグルトからバターを作る。ヨーグルトは加熱したミルクに古いヨーグルトを加え、鍋を布で包んで温かく保って発酵させて作る。

バターを作る手順は次のとおりである。ヨーグルトをヒツジの皮袋に入れて手でゆすって、20分ほど攪拌する。固まってきたバターを布袋で濾して、それを容器に移し、冷水を加えながら15分ほど手で捏ねて固める。完成したバターは皮袋に入れて保存する。

バターを取りだした後に残るミルクからチュルピと呼ばれるチーズを作る。この過程はチャンタンでは見えないが、ドムカルのプー（夏放牧地）で観察した。チーズを採った残ミルクを鍋に入れて温めると原チーズが分離する。これを濾してペースト状になったものを、手で握って指の隙間から絞りだした細長い小片を天日で乾燥させると出来上がる。

なお、チャンタンにおける家畜の搾乳と乳加工のプロセスについては、平田（2012b）も詳しく述べている。

チャンパは、秋に少なくともヤク1頭、ヤギ・ヒツジ数頭を屠って、冬の間の自家消費とする。ヤクの処理の方法は、鼻と口をロープで縛って窒息させるのだという。そのあと、腹部をナイフで切り、手を入れて動脈をちぎる。血を腹腔に溜め、血も食用にする。

表1 ラダーク、チャンタン高地における家畜の価格

家畜の種類	家畜の価格(ルピー)	備考
ディモ(繁殖用)	25000	他の牧民が購入する。
ヤク	35000~45000	食肉用の家畜として、レーから業者が買い付けに来る。
ディモ(肉用)	20000	
ヒツジ(大)	6000	
ヤギ(大)	4000~5000	

家畜の食用としての需要も増えており、レーから食肉業者が買い付けに来るといふ（家畜の価格は表1のとおり）。

2-4 遊牧と移牧、定牧

そもそも「遊牧」とは何かという問題について、ここで再検討しておきたい。梅棹忠夫は、モンゴルの牧畜の形態に基づき、ステップ牧畜民の移動について、次のように述べている（梅棹 1976：133-134）。

ステップ牧畜民の第一の特徴は、ほんとうの意味でノマディックなのです。遊牧的なのです。かれらは、家畜とともに、広大なステップのなかを転々と移動してある。この移動の回数はいろいろあって、一年に二回くらいのから、何十回というまで、いろいろあります。

一般に遊牧運動はたいへん規則ただししい季節移動であるとかんがえられていますが、じっさいはそうではありません。ウマやヒツジの遊牧的移動というのは、かなりでたらめであります。かなり自由な、不規則な移動がおこなわれているのでありますが、遊牧民の移動もじつはかなり自由な、不規則なものなのです。

梅棹が、ステップ牧畜民の移動パターンを典型的な遊牧と捉え、その特徴を、動物の「遊動的移動」になぞらえた「自由な不規則な移動」としていることが確認できる。

筆者の現地調査でも、多くのモンゴル研究者の報告においても、現在のモンゴルでは、冬と春（出産期）には、寒さと子家畜の保護のため、半開放型の固定畜舎に接してゲルを建てるのが知られている（鯉淵 1992、三秋 1995、小長谷 1996、稲村ほか 2001、風戸 2009 など）。冬と春は、ほぼ

毎年同じ場所に戻り、夏から秋にかけて草の状態にあわせてキャンプ地を自由に選択するという移動のパターンである。ホト・アイルと呼ばれる、近い親族や友人の2、3世帯のグループが、隣り合ってゲルを建て、牧畜の作業を共同する。数世帯が一緒に住み協力することで、牧畜の作業をはじめとする日常の生活がスムーズにいくし、その方が心強い。一緒にいる世帯の数が多すぎると、家畜の個体数が多くなりすぎて、周辺の草原への負荷がかかりすぎ、より頻繁に移動する必要も出てきて不便である。家畜の総数がおおむね1000頭以内というのがモンゴルでは一般的である。

ただし、モンゴルでも北部のフブスグル県や西部のバヤンウルギー県やホブド県など山がちの地域では、キャンプ地が固定する傾向が強い（稲村ほか 1995）。ただし、夏と冬で高低差を利用するというより、夏は風通しがいい川辺、冬は北風を避けられる山間の谷間というように、地形による環境条件の違いを利用する機会が多い。

また、モンゴル最北部フブスグル県の「ツァータン」と呼ばれるトゥバ民族のトナカイ遊牧民は、秋、冬、春は、標高1700 m 台の森の中で数家族単位の小集団で広い範囲を比較的自由に移動し、夏には標高2300 m 前後の樹林限界を越えた高原にコミュニティ全体が集合する（稲村 2004）。つまり、一年を通じて離合集散をともなう遊牧をしているが、標高差をも利用しており、夏はキャンプ地がほぼ固定している（稲村 2000）。夏のキャンプ地が固定的で人びとがそこに集まるのは、暑さに弱いトナカイの放牧に適した高原部に限られているからである。

チベットでも、水平的な移動とともに高低差も利用されてきたことが報告されている（稲村ほか 2000）。戦前8年間にわたって北東部チベットに住んだイクヴァルによれば、ヤクの遊牧民の移動は、次のようである（Ekval1968：31-34）。ふつう1年間に3回から8回の移動を行い、特別な場合には12回に及んだ。冬の放牧地は標高が低く比較的暖かい場所が選ばれた。春になると、草の生長に合わせるように、順次高いところに移動してゆき、夏には雪線に近い最も標高の高いところで放牧した。ヤク遊牧民の中には、土や日干しレンガや畜糞で作ったり、掘った縦穴や洞窟を利用した冬の固定住居をもち、秋に草を刈り干し草を冬

のために用意する人びともいた。一方、定住を遊牧民にとって卑しむべきことと考へ、1年をとおしてテントで生活し干し草も作らない人びともいた。いずれの場合も冬は標高の低いところを下りた。そこは農村から比較的近い場所であるため、冬は農民との交流が盛んに行われた。

筆者は、「遊牧 (pastoral nomadism)」と「移牧 (pastoral transhumance)」は、理念型として捉えるべきものだと筆者は考へている。つまり、水平的/垂直的、不規則/規則的というふたつの対立軸の両極が「遊牧」と「移牧」で、「遊牧」の典型は「水平的で不規則な移動」、「移牧」の典型は「垂直的で規則的な移動」であるが、それぞれの二つの要素は必然的に結びついているわけではない。また、水平的/垂直的の対立は二律背反ではなく、チベットにみられたように、その両者をもち合わせたものもある。

なお、アンデスのリヤマ・アルパカ牧畜の場合には、熱帯の高地に位置するために気温の年較差が少なく、高所特有の湿原の存在により、一年を通して標高約 4000 m 以上の高原の一定の領域内での家畜の維持が可能であり、それを筆者は「定牧 (sedentary pastoralism)」としている。平田は、チャンタンのカルナクバに関する 2 つの論文のなかで、筆者の著書 (稲村 1995) を参照しながら「移牧は、ヨーロッパやアンデス、チベットなどの山岳地帯でみられるように、『季節的に上下移動して農作物栽培や家畜飼養をおこなう生業』を意味している」(平田 2012a: 122, 2012b: 128) と述べ、ヨーロッパ、チベットと同様にアンデスでも移牧が行われているとしているが、これは根本的な誤謬であり訂正しておきたい。筆者はそれとはまったく逆に、ヒマラヤの「移牧」に対して、アンデスが「定牧」であることを主張している (稲村 1995, 2007, 2010 など)。また、平田は移牧の重要な要素として半農半牧をあげているが、農牧民が「移牧」を行っている事例は多いものの、それは「移牧」の必要条件ではなく、専門の牧民が「移牧」を行っている事例も少なくない。筆者は、「移牧」を単なる移動のパターンとして捉えるべきだと考へている。

さて、すでに述べてきたように、チャンタンのルプシュパは、ヤクとヤギ・ヒツジを飼い、8ヶ所を移動している。Rizvi は「ルプシュにおいて、

テントで疎らに生活するチャンパは、何世紀も続いてきた移動パターンで、放牧地から放牧地へとヒツジ・ヤギの群を連れて移動している」と述べている (Rizvi 2012: 39)。ルプシュパは、チベットの遊牧民と同様に、一般にも、研究者によっても「遊牧民 (nomad)」と認識されており、これを遊牧ではないと否定することは意味がないⁱⁱ。

中国領内チベットでは人民公社と改革開放政策後の牧草地配分を経て、牧畜システムが大きく変化しており、伝統的な遊牧のシステムを現在は見ることができない。Goldstein が調査を行っている西チベットのチャンタンのパラ (Pala) では、主たるキャンプ (home camp) と 9 月から 3 カ月間滞在するサテライト・キャンプ (satellite camp) の 2ヶ所だけで移動を行っている (Goldstein and Beall 1990: 58-65)。両地域の距離は 1~2 日と短く、毎年同じ場所に戻る。移動が短距離である理由として、Goldstein は次のように述べている (Goldstein and Beall 1990: 58)。「冬に新しい草が育つ低地に何百マイルも移動する南西アジアの遊牧民と違って、チベットの遊牧民 (nomadic pastoralists) は厳しい高地の冬の気候から逃れられない、チベットでは近隣の地域はすべて同一の時期に草が生長するからである。彼らの一年の移動は、10~40 マイルにすぎない。実際、彼らは、旅が家畜を弱め、死亡率を増加させると考へ、旅を最小限にしようとする。ある遊牧民が言うように、近くにある可能な放牧地と変わらない放牧地に着くために、どうして家畜を長い疲れる旅に連れていかなければならないのだろうか?」。

ルプシュパの移動は、どちらかといえば水平的であり、西チベットのパラの遊牧民と比べても、より頻繁により広い範囲を移動している。夏場は、ザラ川の支流に注ぐいくつかの谷間をキャンプ地と移動しており、その地域は 4700~4900 m に位置する。冬場には標高 4500m 台に位置する盆地のカル湖やスタルツァベック湖の湖畔にキャンプ地を定めている。つまり、300~400 m の標高差と地形的なパリエーションを利用してより頻繁な季節移動をしている。パラとは異なり、比較的近い地域に標高差があり、冬を過ごしやすい盆地内の湖畔の草地があるからであろう。

数家族のホト・アイル (宿営集団) 単位で移動するモンゴルの遊牧民と異なり、またチベット高

原の多くの遊牧民とも異なり、ルプショパはすべてのメンバーが集まってキャンプを作り、一緒に移動する。そのため家畜総数が多くなっている。キャンプ地が8か所と多いのは、それが要因の一つであろう。現在は、放牧による自然の草だけでは賄いきれず、飼料を購入している（平田 2012a）。

2-5 ルプシュの遊牧の特徴

ルプシュでは、キャンプ地が固定しているだけでなく、その中でテントサイトも固定する傾向にある。それも、モンゴルの遊牧民とは大きく異なる点である。石積みの半地下式テントサイトは、寒さを防ぎ少しでも快適に生活するための工夫である。この半地下式のテントサイトはバラの主キャンプ地でも作られている（Goldstein and Beall 1990: 62）。バラでは、深さが4フィートほどである。ルプシュにおいても、冬のキャンプ地のテントサイトには同じくらいの深さのものがある。また、バラと同様に、ルプシュの冬のキャンプ地では、石積みの家畜囲い、家屋・貯蔵庫が作られている。

3 交易：聞き取りから

3-1 長老のSA氏（82才）

長老のSA氏が、昔、西のザンスカル、北のチベット、南のヒマチャル・プラデーシュなどで行っていた交易について、次のように語ってくれた。

・ザンスカルへ

道路ができる前は、オオムギを手に入れるため、ザンスカルまで行った。チベット暦8月～9月（西暦9月～10月）のオオムギの収穫期に最もよく行った。ヤクでは蹄が傷ついて長旅ができないので、チベットの塩を小さい荷袋に入れて雄のヒツジに背負わせた（写真11）。夏には15～20日かかった。冬には、日が短いので、約1ヶ月かかった。人が行くだけなら9～10日で行けたが、ヒツジ・ヤギを連れていくと1ヶ月かかったのだ。ザンスカルでは、ヒツジやヤギも売った。

・チベットとの交易

1959年までは、塩を手に入れるために、中国製の銀貨とオオムギを持って、チベット（チャンタン）に行った。人が行くだけなら1ヶ月、ヒツ

ジ・ヤギを連れて行くと1ヶ月半かかった。チベットからこっちに塩を持ってくる人もいた。彼らには塩の代金として銀貨を渡した。ドムカルからもチベットに行く人がいた。彼らはドムカルから乾燥アプリコットとツァンパを持っていき、チベットで塩と羊毛を手に入れていた。

・南のヒマチャル・プラデーシュとの交易

南のダルチェ（Dartse, Darcha）やスムド（Sumdo）にも行った。そこまでは8～9日かかった。羊毛、パシュミナ、塩を持っていき、オオムギ、コメ、コムギ、マメ、砂糖、食用油などを手に入れた。ケロン（Keylong）の手前まで行ったが、それより南は暑すぎて行かなかった。

3-2 前ゴワのSD氏（44才）

前年までゴワ（長）を務めていたSD氏は、父親と交易の旅に行ったことがあり、また彼自身もトレーダーとして交易を経験している。聞き取りで、彼の父が行っていた交易、彼自身が若い時に行った交易、また交易の衰退について語っていた。

・父と一緒にいった交易

父はザンスカルに交易に行っていた。片道で1ヶ月かかった。チベット暦の6月、7月ごろに行っていて、11月に帰ってきた。新年の10日前ごろである（ラダークでは新年が12月と定められている）。南のダルチャやスムドにも行っていた。

交易の出発前には、みんなで宴会をやった。帰りは、商売がうまくいった人とそうではない人がいて、ある人は嬉しそうだが他の人はあまり嬉しくない、という感じだった。

父はレーへも交易に行っていた。ヒツジを連れて、15日くらいかかった。途中で、2～3日放牧して休ませた。ヒツジの毛をレーで刈って売り、オオムギを手に入れて、ヒツジに積んで帰ってきた。

2年間、父と一緒に交易に行った。オジや隣人と4人のグループで行った。160頭のヒツジを連れていった。（北の方角に位置する）ティクツェ（Tiktse）、シャクティ（Shakti）まで行った。現地には父の友達がいる、すぐに交換できた。シャクティの人が塩や羊毛あらかじめ注文していたので、すぐにオオムギと交換できた。

・自らの交易活動

27才のとき、父とは別のグループで、自らトレーダーとしてシャクティに行った。塩と羊毛を、オオムギ、砂糖、お茶などと交換した。(交易のバランスをとるため)どちらかの量が多すぎるとき、その補充として現金を使ったが、ほとんどは物々交換だった。

・交易の衰退

自分が22 - 23才くらいのとき(約20年前)から、レーで羊毛を買う人が少なくなった。道路が整備され、そのころから、こっちに車で羊毛を買いにくるようになった。また、自分が30才のころ(約15年前)から、交易をしなくなった。道が整備され、政府の食糧援助(配給)が始まったためである。

4 過去に行われていた交易、衰退とその背景

Rizvi が著書 *Himalayan Trader* で、ラダークのチャンパによる過去の交易について詳述している(Rizvi 1999)。また、Ahmad がツォカル(カル湖)における塩の採集とルプシヨパによるその交易について紹介している(Ahmad 1999)。それらの記述に基づき、ここではまずチャンパの伝統的な交易とその変化について、またその衰退とその要因、背景について分析したい。

4-1 ザンスカルとの交易

1940年ごろから1980年代まで、チャンパは、6-7月と9-10月の年2回、ザンスカルに塩を持って交易に行っていたという。ルプシュ・チャンパの長老の Tsering Paljor の聞き取りから、Rizvi がその交易ルートを次のように紹介している(Rizvi 1999: 119-121)。北ルプシュのタグラン峠のすぐ南のデプリンから、レー=マナリの交易ルートに沿って南下し、ルンガ・ラチャ峠(Lunga-Lacha-la)を越えてセルチュ(Serchu)に至る。そこから北西に針路を変え、ピルツェ峠(Phirtse-la)を越えて、タンツェ(Tangtse)で(ザンスカルの)ルンナク(Lungnak)谷に入るルートであった。

Rizvi はまた、当時の交易の様子について次のように記している(Rizvi 1999: 119-120)。

彼らは仏暦5月(西暦7月)と仏暦8月(西

暦10月)の年2回ザンスカル行った。この交易の旅はそれぞれ14日かかった。ザンスカルでの7~10日間の滞在を含め、往復5~6週間の旅だった。早い方の旅では、その往路か復路に、何人かのメンバーはセルチュから分かれて、レー=マナリの交易ルートを南下し、ドズム Dozum (パツェオ Patseo) まで行った。そこには常設の市はなかったが、人びとが物売ったり交換する場所があった。チャンパはそこでラフル(Lahul)やナマリの人、カルジャパ(Kar)に塩とウールを売った。塩はオオムギとコメと交換し、ヒツジー頭分のウール(パッティ)を1.25ルピーで売った。Tsering Paljor は、コメのチャン(酒)をよく覚えている。

Tsering Paljor の子供のころ—1920年代の初めから半ば—には、ルプシュには約30のテントがあった、つまり30家族のチャンパが暮らしていた。そして、少なくとも一家族から一人がザンスカルへの旅をし、平均125から150のウールと塩のヒツジ荷を伴って行った。彼自身が、16歳から50歳頃まで、毎年行っていた。

(筆者注: 以下は Tsering Paljor の言) ザンスカルの中央盆地の端に位置する中心的集落であるパドゥム(Padum)までは、全員が一緒に旅をした。パドゥムからは、ザンスカルの異なる村に散っていった。……決して二人が同じ家に行くということではなかった。それぞれの者が前年に行った村と同じ村に戻った。それは、彼の父、彼の祖父が行った村と同じだった。我々の仲間とザンスカルの人は友人となり、それはビジネスにとっていいことだった。このようにして、我々は、できる限り多くの村をカバーするように努めた。すべての塩とウールを穀物と交換すると、我々はパドゥムに戻り、そこから一緒にルプシュに向かう帰路についた。

4-2 塩の交易

同じく Rizvi が塩の採取と交易に関して次のように記している(Rizvi 1999: 120-121)。

1950年代のラダークとチベットの間の国境封鎖までは、遠くザンスカルやドズム(Do-zum)まで交易されていた塩は、ルプシュにあるカル

湖から採取されたものではなく、遙か国境の向こうから持って来られたものだった。カル湖の塩は、チベットの亡命者たちが発見したとインフォーマントの Tsering Paljor は断言する。

チャンパ牧民たちは、西チベットに塩を取りに、ミンドゥム (Mindum) とキェルツェ (Kyeltse) という場所の塩湖に毎年行っていた。デブリンからミンドゥムまで 18 日かかり、キェルツェはそこより近かった。両地域に集落は無く、地域の数家族のチャンパがテントを張っていた。

塩を取るために、各家族から一人出ていたわけではなく、金を支払って依頼する場合もあった。典型的には、ルプシュから 20 人の男が行き、それぞれが 200 頭のヒツジ・ヤギを連れて行った。塩湖に着くと、ヒツジ・ヤギに積めるだけの塩を取ってよかったが、50 頭分の塩に対して、1 頭のヒツジと荷袋をチベットの役人 (Rurok-tsong) に支払った。

Ahmad も、1960 年代まではほとんどのヒマラヤ地域にチベットから塩が供給されていたと述べ、チベットでの塩の採集について次のように記している (Ahmad 1999 : 33-36)。

……毎年、新年のあと、ルプシュパは西チベットのミンドゥムとキェルツェの塩湖への旅を行っていた。たくさん家畜を所有する男たちは、200 から 300 頭のヒツジを連れ、あまり家畜を持たない男たちは、労働力を提供するために彼らに同行した。ルプシュにもどると、彼らはまず、その塩を、ザンスカルでオオムギ (nas) と交換するために使った。

畑と家畜が一家の生活にぎりぎりの最も貧しい農民でさえも、ルプシュパのために少しのオオムギを取り分けておくことに選択の余地はなかった。さもなくば、塩のない食事を摂らなければならないという、考えられない状況に陥るからだ。人びとだけでなく、家畜にも塩はぜひとも必要だった。

年の後半、ふつう 8 月に、ルプシュパは、ヒマチャルの近くのドズムで開かれる年毎のフェアまで旅して、塩を茶、砂糖、香辛料、コメ、

その他の食糧と交換した。ドズムは市が開かれる場所であり、そこには、ルプシュ、チベット、ザンスカル、ラダーク、クル (Kulu)、チャンバ (Chamba)、ラフル、それにランブル (Rampur) から交易者が集まった。さらに、下ラダークからルプシュに、アプリコット、穀物、クルミ、ダイコンなどを塩と交換するために持ってきた。

チベットとの交易が閉ざされた 1960 年代以降、チャンタンのルプシュのツォカル (カル湖) で塩が「発見」され、そこで塩が採取され、ザンスカル等と交易に使われるようになった。ツォカルでの塩の採集のやり方は Ahmad によって詳しく報告されている (Ahmad 1999 : 41-47)。

ツォカルの塩はチベットから入ってきた難民が見つけたという伝承がある。しかし、少なくともそれ以前からツォカルの塩は家畜に与えられていたという事実は知られており、他にも様々な伝承があり、ツォカルの塩が以前からあったのか、また使われていたかどうかという判断は難しいという (Ahmad 1999 : 36-40)。

政府が塩を配給するようになると、ツォカルの塩への需要が減少した。しかし、ツォカルの塩の方を好む人びとが居て、それは今も採取されている。「ツォカルの塩でなければバター茶が美味しくない」「ツォカルの塩を使えば病気になる」「政府の塩を食べるようになったら、高血圧だといわれた」などの住民の言説が報告されており、塩の採集はルプシュパの男のアイデンティティでありツォカルとの結びつきの表現であるという (Ahmad 1999 : 47)。なお、ラダークの農牧民の塩の消費については、池田菜穂が、ドムカル村で、1 世帯あたり年間、2 ~ 4kg (20 ~ 40 ルピー) の塩を消費していることを報告している (池田 201 : 98)。

4-3 食糧援助 (配給) と交易の衰退

チベットとの交易は、1950 年代末の共産主義中国によるチベット支配、ダライラマ政権のインド亡命、その後のラダーク—チベットの国境封鎖によって断絶した。国境紛争により、国境への大規模な軍の配備がなされ、兵站補給の必要性から道路建設が促された。国境紛争はまた、国境地帯の住民の国家統合とそのための政治的経済的配慮の必要性を増大させ、食糧援助などを促した。そ

の結果、舗装道路が建設され、同時に食糧配給所が開かれた。それらが伝統的な交易の消滅を加速させたといえる。Ahmad は交易の衰退の過程を下記のように述べる (Ahmad 1999 : 36)。

(南のインド) 平原から運び込まれる穀物と海の塩が (食糧配給所に) 貯蔵され、補助金による非常に安い価格で販売された。ルプシュで最初に止まった交易ルートは塩を得るためのチベットへのルートである。ルプシュパは塩の採集をルプシュの中にある塩湖に切り替えたが、ドムズのフェアへの旅の必要性を感じなくなった。穀物や他の品物が配給のトラックでかれらの元にもたらされるようになったからである。下ラダックの農民たちも次第にルプシュに来ることをやめるようになった。現在は、僅かな人だけがジープで来るようになった。ザンスカルとの交易は、その後 10 年から 15 年の間続いたが、ついに 1980 年代にそれも終わった。

最後の交易活動を経験した前ゴワの SD 氏からの聞き取りは、上記の説明と符合する。彼によれば、今から 20 年ほど前からレーからマナリに通じる道が整備され、同時に、政府による配給が届くようになった。今は、小麦粉は 50 kg 当たり 447 ルピー、コメ 50 kg 当たり 590 ルピーで買うことができる。

レーの商店ではコメは 50kg 当たり 1250 ~ 1500 ルピー (25 ~ 30 ルピー /kg) で売られている。つまり、政府の援助によって、ラダークの人びとは自家消費用の小麦粉とコメは市場価格の 4 割の価格で購入することができるようになったわけである。自家消費として、1 人 1 ヶ月当たり、コメ 11 kg、小麦粉 11 kg、砂糖 2 - 4 kg が認められているという。また 1 家族で 120 リットルの灯油が配給される。砂糖の配給価格は 1 kg 当たり 12.5 ルピー、灯油の配給価格は 20 リットル当たり 440 ルピーである。日常の消費に加え、正月には灯油 40 リットル、砂糖 4 - 5 kg の特別配給もある。

5 おわりに—医学班への若干の示唆

本文で見てきたように、ラダークのチャンパは、以前は遊牧と交易によって生計を立ててきた。交易は、北のチベット、西のザンスカル、南のヒマ

チャル・プラデーシュへの大規模なものであった。これまで論じたように、中国との国境紛争、舗装道路の開通、政府による食糧配給による援助、さらに、レーの都市の拡大・観光化や軍による雇用と需要などによって市場経済が浸透し、約 15 年前に、生業の二本柱のひとつであるキャラバン交易がほぼ完全に消滅した。

道路の開通に伴い、また食肉としての家畜の需要が増え家計収入が増加した。遊牧システムでは、家畜とそれを追う人は徒歩で移動するが、車を所有する世帯も増えてきたことから、家財と家族の移動が車で行われることが普通になった (写真 12)。レーに移住する家族も増え、都会生活との接点が大きくなった。そのため、レーの学校に通う子供が多くなっている。また近年、ニョマヤスプガに小学校が作られ、子供たちがみな学校に行くようになった。子供たちがレーの学校に行くことにより、レーでそのまま仕事に就く例もでていく。そのような例は今後増えていくことが予想される。こうしてラダークのチャンパの人びとの生活が大きく変化しつつある。

ルプシュ独特の工夫や特徴を備えた遊牧システムは維持されており、昔ながらのテント住居、家畜の放牧、搾乳、乳加工などを基本とする日常生活は継承されている。ただし、20 年ほど前の生活に比べれば、身体的活動はかなり軽減された。車での移動ができるようになり、とくに、老人の身体的な負担は軽くなった。しかし、依然として、過酷な自然環境における家畜の放牧や季節移動などの活動は相当に厳しい。

食生活に関して詳しい調査はできなかったが、以前の交易とその衰退、政府による食糧の配給などを考慮すれば、カロリー源をオオムギのツァンパに大幅に依存する食から、コムギ、コメ、野菜などの増加による多様性の向上が推察される。一方、タンパク源については、乳製品は、以前と変わらず自家生産・自家消費している。また、ルプショパは、秋に家畜を自ら屠っており、冬季にはかなりの肉を自家消費している。塩に関しては、ルプショパは、以前はチベットで採取した塩を採取して交易に使っていたし、1960 年代以後は、地元にあるツォカルの塩を採取して自家消費と交易に利用してきた。

注

- i ラダークでの調査には、共同研究者であるキソル・チャンドラ・カナルが、8月25日から9月5日まで参加した。チャンタン調査には1泊1日のみの参加となった。
- ii ただし、チャンタンでもある程度の標高差を利用していることから、それを移牧とする考えもある。Bhasin は、ルブシュパの場合を、夏と冬とで標高差が200～300 mのキャンプ地の間を移動する移牧（Transhumance）と捉えている（Bhasin 1996）。

引用文献

池田菜穂 2010「現代のインド、ラダーク地方における牧畜業の経営状況—下ラダーク、ドムカル村における事例調査報告」『ヒマラヤ学誌』11：91-105

稲村哲也 1995『リヤマとアルパカーアンデスの先住民社会と牧畜文化』花伝社

2000『「ツァータン」—モンゴル辺境部におけるトナカイ遊牧と市場経済化過程における社会変動—』『エコソフィア』5号、101-118頁

2004「牧畜からみた山の文化—中央アンデスをヒマラヤと比較して」『山の世界』梅棹忠夫、山本紀夫編、岩波書店、225-236頁

2007「旧大陸の常識をくつがえすアンデス牧畜の特色」、山本紀夫編『アンデス高地』京都大学学術出版会、259-277頁

2010『「熱帯高地」の比較研究—ヒマラヤ・チベットとアンデスにおける高度差利用』『ヒマラヤ学誌』10号：115-134

稲村哲也・本江昭夫・山本紀夫・蘇鳳鳴・楊中芸 2000「チベットにおける農業と牧畜の現状」『愛知県立大学文学部論集』49：1-21

稲村哲也・古川彰・エンクチュルーン 1995「モンゴルにおける社会主義体制の終焉—経済・社会・文化の変動と環境問題—」『リトルワールド研究報告』12：28-89

稲村哲也・古川彰・結城史隆・渡辺道斉・スフバートル 2001「市場経済化過程におけるゴビ地方遊牧社会の現状と社会・経済変動」『リトルワールド研究報告』17号、127-139頁（共著）

梅棹忠夫 1976『狩猟と遊牧の世界』講談社

鯉淵信一 1992『騎馬民族の心—モンゴルの草原

から』日本放送出版協会

小長谷有紀 1996『モンゴル草原の生活世界』朝日新聞社

平田昌弘 2012a「チベット高原西部におけるチベット系ラダーク牧畜民カルナクパの季節移動システム—インド北部ヒマラヤ山脈西部北斜面チャンタン地域カルナクパでの事例から—」『ヒマラヤ学誌』13：113-127

平田昌弘 2012b「インド北部ヒマラヤ山脈西部北斜面チャンタン地域における遊牧民の生業構造についての予備的調査—遊牧民カルナクパD世帯における食糧摂取の事例から—」『ヒマラヤ学誌』13：128-141

風戸真理 2009『現代モンゴル遊牧民の民族誌—ポスト社会主義を生きる』世界思想社

三秋尚 1995『モンゴル 遊牧の四季—ゴビ地方遊牧民の生活誌』鉦脈社

山本紀夫・稲村哲也（共編著）2000『ヒマラヤの環境誌—山岳地域の自然とシェルパの世界—』八坂書房

Ahmad, Monisha 1999 “The Salt Trade: Rupushu’s Annual Trek to Tso Kar.” In Beek, Martijn von, Kristoffer Brix Bertelsen & Poul Pedersen (eds.) LADAKH: Culture, History, and Development between Himalaya and Karakoram. Alden Sterling Publishers, New Delhi, pp.32-48

Bhasin, Veena 1996 Transhumants of Himalayas Changpas of Ladakh, Gaddis of Himachal Pradesh and Bhutias of Sikkim. Kamla-Raj Enterprises, Delhi

Ekvall, Robert B. 1968 Fields on the hoof: Nexus of Tibetan nomadic pastoralism. Waveland Press, Illinois.

Goldstein, Melvyn C. and Cynthia M. Beall 1990 Nomads of Western Tibet: The Survival of a Way of Life. Osysey Productions Ltd. Hong Kong

Rizvi, Janet 1983 (Third edition 2012) Ladakh: Crossroads of High Asia. Oxford University Press, New Delhi

Rizvi, Janet 1999 (Paperbacks 2001, Fifth impression 2010) Trans-Himalayan Caravans: Marchant Princes and Peasant Traders in Ladakh. Oxford University Press, New Delhi

Summary

Nomadic Pastoralism and Trade on Changtang Plateau in the Southeast Ladakh, India

Tetsuya Inamura

Aichi Prefectural University, Faculty of Foreign Studies

This article describes the research of nomad's life in Rupshu community on Changtang plateau which was conducted as a part of the project; Human Life, Aging, and Disease in High-Altitude Environments: Physiomedical, Ecological and Cultural Adaptation in the Great “Highland Civilizations” at the Research Institute of Humanity and Nature in September 2012. A medical team of the project had carried out health-checkup of the nomads on Changtang plateau in 2011. This research aimed to collaborate with the medical research for the further understanding of the lifestyle of nomads, such as patterns of nomadic migration, family unit, camping place, traditional barter system and its declination and changes in their lifestyle.

Rupshu-pa, the nomads in the Rupshu community, move to eight camp sites in a year. Their camping areas are fixed even though they are moving. Moreover, their tent sites are also fixed. They usually use the same half-basements with piled stones every year, and set the tents on them.

Chang-pa, people on Changtang plateau, used to live by nomadic pastoralism and trade. They continue the original system of the pastoralism still today. On the other hand, the long-distance “caravan trade” which used to travel to Tibet to the north, Zaskar to the west, and Himachal Pradesh to the south, disappeared about 15 years before. Backgrounds of the disappeared caravan trade were the border dispute with China, the newly-opened paved road, food aids by the government, and the transition to a market economy caused by the rapid urban growth of Leh, with expanding tourism and military needs.

Rupshu-pa reduced their nomadic activities along with the disappearing caravan trade. Their dietary style had been changing to get various foods by the government's aids, from the traditional diet largely depended on barley.